

国立大学法人化に関わるアンケート 結果概要

回答数 37

集計結果

【1】国立大学法人化に伴う職務内容、就業形態の変化について

法人化の前後での職務内容の著しい変化の有無

回答	あり	なし
N (%)	10 (27.0%)	27 (73.0%)

【2】研究教育活動について

新しい取り組みの有無

教育内容	あり	なし
「学部教育 衛生学公衆衛生学分野」	11 (29.7%)	26 (70.3%)
「学部教育 衛生学公衆衛生学分野以外」での医学部全体	16 (44.4%)	20 (55.5%)
「大学院教育 衛生学公衆衛生学分野」	3 (9.4%)	29 (90.6%)
「大学院教育 衛生学公衆衛生学分野以外」での医学部全体	13 (38.2%)	21 (61.8%)

研究費の一般管理費（オーバヘッド）：大学・学部合計

研究費種類	0%	1~9%	10~29%	30%~	その他
学振（文科省）科研費	22 (68.8%)	2 (6.3%)	1 (3.1%)	—	7 (21.9%)
厚生労働科研費	23 (79.3%)	1 (3.4%)	1 (3.4%)	—	4 (13.8%)
共同研究資金	19 (67.9%)	4 (14.3%)	2 (7.1%)	2 (7.1%)	1 (3.6%)
受託研究資金	10 (31.3%)	2 (6.3%)	6 (18.8%)	11 (34.4%)	3 (9.4%)
奨学寄附金	2 (6.1%)	20 (60.6%)	8 (24.2%)	2 (6.1%)	1 (3.0%)

【3】教員の雇用形態について

任期制の有無

回答	あり	なし	検討中
N (%)	29 (78.4%)	6 (16.2%)	2 (5.4%)

任期

教官	なし	3年	5年	7年	10年
教授	18 (50.0%)	—	5 (13.9%)	—	13 (36.1%)
助教授	16 (44.4%)	1 (2.8%)	11 (30.6%)	8 (22.2%)	—
講師	16 (44.4%)	—	12 (33.3%)	8 (22.2%)	—
助手	9 (26.5%)	—	25 (73.5%)	—	—

【4】産学連携活動等について

法人化の前後での産学連携活動等の円滑化

質問項目	円滑化した	していない・変わらない
兼職手続き	12 (36.4%)	21 (63.6%)
特許申請手続き	11 (45.8%)	13 (54.2%)

(注) %の分母は各項目の有効回答数

Ⅱ. 分担研究報告書

厚生労働科学研究費補助金（健康科学総合研究事業）

分担研究報告書

公衆衛生専門家の生涯教育に関する研究

分担研究者 二塚 信（熊本大学教授）

研究要旨 医学教育の変革期にあたり、地域保健を担う公衆衛生の専門家の養成システムの再構築および質の高いマンパワーの継続的確保が必要である。そのためには、公衆衛生のアイデンティティ（独自固有性）を明確にするために、公衆衛生専門職に必要とされる資質を明らかにすることが必要である。本年度は、公衆衛生人材養成システムの前提となる公衆衛生専門職とは何であるか、その要件について、分担研究者が中心となって日本公衆衛生学会人材委員会で検討した理念について提言を行う。

A. 研究目的

医学教育の変革期にあたり、公衆衛生専門家の養成システムを再構築し、質の高いマンパワーを継続的に確保するための方策を提示することである。国際的な新興・再興感染症の流行ならびに災害やテロの発生に伴う危機管理の観点から、公衆衛生課題への対応は国際的な視野が不可欠となっている。また効果的効率的な健康政策の立案と政策評価は公衆衛生事業運営の必須の要素である。このような多様な課題に対応する地域保健を担う公衆衛生専門家に、高い水準の知識と技能が求められることから、その養成システムの構築、質の高いマンパワーを継続的に確保するための方策に関する研究が必要である。また、医学教育においては全国共用試験が実施され、16年度より医師の卒後臨床研修制度が開始された。一連の医学教育改革の中で国ならびに地域の公衆衛生を担う優秀な能力を備えた人材を養成し、国民の公衆衛生の向上に寄与するためには、幅広い領域にわたる公衆衛生の高い専門性を獲得できる人材を発掘し、公衆衛生の知識・技能・態度を養成するプログラムを提供し、優れた資質を有する公衆衛生専門家を育成し、さらにこれらの人材

の生涯教育システムを構築する必要がある。そのためには、公衆衛生のアイデンティティ（独自固有性）を明確にするために、公衆衛生専門職に必要とされる資質を明らかにすることが必要である。

本年度は公衆衛生人材養成システムの前提となる公衆衛生専門職とは何であるか、その要件について、分担研究者が中心となって日本公衆衛生学会人材委員会で検討した理念について提言を行う。

B. 研究方法

日本公衆衛生学会は、公衆衛生分野において実践的で高度専門職業人としての望ましい資質及びそれを養成する仕組みについて検討するために2年間の期限で公衆衛生人材委員会（委員長二塚信）を設置し、精力的な検討を行ない、中間報告を提出した。

現在、当学会では、この報告を広く会員に周知するとともに、意見を求めており、成案は未だ得られていない。本研究では、この中間報告のなかで、公衆衛生人材養成の前提となる公衆衛生専門職に必要とされる資質に関する部分に検討を加え、ここに提示することを試みた。

(倫理面への配慮)

本課題については当該項目への論及は必要ないと考える。

C. 研究結果ならびに、D. 考察

公衆衛生とは、人々の健康をまもり、増進し、また回復させるために社会により組織された活動の総体である。集団的なあるいは社会的な活動を通して総ての人々の健康を保持・改善することを目指す科学、技術および信条の統合されたものである。そのための計画、サービス、制度は集団全体としての疾病予防とヘルスニードを強調したものである。公衆衛生の目的は、全ての人々があらゆる生活の場で健康を享受することのできる公正な社会の創造にある。そのため人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるプロセスであるヘルスプロモーションを推進する必要がある。公衆衛生活動は科学技術や社会的な価値観の変化とともに変わるものであるが、その最終目標、すなわち、集団の疾病や早世、疾病罹患によってもたらされる QOL の低下と障害の量を軽減するという目標は変わるものではない。このように、公衆衛生は、一つの社会的な制度であり、一つの学問的分野であり、また一つの実践活動である。

少子高齢化という人口転換と健康転換といわれる疾病構造の変貌は、経済成長の鈍化のなかで医療費の増大をもたらしている。他方、科学的な根拠に基づく保健医療福祉の重要性が求められ、また、疫学の発展のなかで病因解明への期待とともに予防に対する重要性が尊重されている。あわせて保健医療福祉のパラダイムが拡大するとともに、その実践活動を担う主体が医師を中心としたパターンリズムから、チーム医療さらに住民の主体性が尊重される方向に転換しつつある。

このような歴史的趨勢のなかで、公衆衛生専門職に必要とされる資質は次のようにまとめられよう。

(1) 保健医療福祉の分担と連携の意義を認

識し、ことに健康増進から疾病予防並びにリハビリテーションの一貫した活動の重要性を理解し、そのための実践的技法を持つ。

- (2) 各ライフステージにおける生活習慣の健康に対する意味と生活の場における保健医療福祉活動を理解し、そのための技術を持つ。
- (3) 個人と集団に対する理解、ことに健康事象を集団として取り扱い、健康の実態とその規定要因を明らかにすることの意義を理解し、そのための疫学的認識と技術を持つ。
- (4) 職場、学校、家庭、地域などあらゆる生活の場における環境条件と健康事象の関連を理解し、その改善を通して人々の健康を実現していく技法を持つ。
- (5) 健康の成立条件、ことに遺伝と環境との重層的相互関係と環境作用、環境形成作用の意義と重要性を理解し、生態学的視点を持つ。
- (6) 公衆衛生活動の重点目標を明確にするためのマネジメントの意義を理解し、目標による管理の技法を持つ。
- (7) 個別のセクターを越えた学際的、包括的取り組みに適応し、そのなかで自らの役割を積極的に意識し、リーダーシップと調整能力を持つ。
- (8) 住民参加の意義を理解し、住民の自立的組織の育成と住民の健康に関する自己決定を尊重する態度を持つ。

E. 結論

公衆衛生分野において実践的で高度専門職業人として望ましい資質について検討を行なった。本提言は、公衆衛生専門家の生涯教育における到達目標として位置付けられるものである。

F. 健康危険情報

該当なし。

G. 研究発表

該当なし。

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む。)

該当なし。

厚生労働科学研究費補助金（健康科学総合研究事業）

分担研究報告書

医師卒後臨床研修における公衆衛生技能の養成に関する研究

分担研究者 川口 毅（昭和大学教授）

研究要旨 臨床研修の本格的な実施年を迎え、本研究の初年度には、臨床研修2年次における必修科目である地域保健・医療にかかわる研修カリキュラムについて具体的に作業グループを設けて検討した。さらに地域保健・医療研修をすすめるための地域での体制づくりについても検討しモデル組織規定を作成した。これからの医療の動向を踏まえ、少なくともプライマリヘルスケアを理解し参加できるプライマリフィジシャンを養成するため最小限習得すべき内容についてあわせて検討した。次に、全国の医科大学の衛生学・公衆衛生学教室を通じてこれからの臨床研修の各医科大学のカリキュラムづくりや体制づくりにどの程度参加したかの実態調査を行ない、今後もさらに深くかかわっていくための条件等についても調査を行なった。本年度は、昨年度の成果をふまえ、地域保健・医療研修評価のためのワークショップを開き、地域保健・医療研修のモデル評価票、および契約等に関わる様式案を作成した。

A. 研究目的

これからの医療のあり方を考えるにあたってプライマリケアの充実是最も重要な要素である。臨床研修における地域保健・医療研修（プライマリケア研修）の充実を図るためのカリキュラムを作成し、将来地域において予防医学を含めたプライマリケアを実践できる医師を養成することを目的とした。

B. 研究方法

全国の医学部衛生学・公衆衛生学の教授からなる上記の目的を達成するためのワークショップを平成16年12月25日（土）開催した。（倫理面への配慮）

本ワークショップおよびその報告書内では個人情報については取扱わなかった。

C. 研究結果

研究成果の刊行物・別刷欄参照。

D. 考察

研究成果の刊行物・別刷欄参照。

E. 結論

研究成果の刊行物・別刷欄参照。

F. 健康危険情報

G. 研究発表

本研究の経過および成果を衛生学公衆衛生学教育協議会総会（島根：平成16年10月、新潟：平成17年3月）で発表した。

また、本研究の成果は、書籍：コアローテーション地域保健・医療／予防医療、内に収載された。

衛生学公衆衛生学教育協議会（編） 臨床研修
地域・医療研修実態調査結果ならびにプロ
ラム検討結果報告書 衛生学公衆衛生学教
育協議会 2004:pp.36

地域保健・医療研修の評価方式等の様式 In：
コアローテーション地域保健・医療／予防医
療（河野公一、川口毅、松浦尊磨、編） 金
芳堂：京都 2005:p327-347

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む。)
該当なし。

厚生労働科学研究費補助金（健康科学総合研究事業）
分担研究報告書

パブリックヘルスマインド養成に関する研究（社会医学サマーセミナー）

分担研究者 中村 桂子（東京医科歯科大学助教授）

研究要旨 医学部・医科大学の学生に、社会医学の研究と実践についての理解を深めさせ、パブリックヘルスマインドの養成をはかり、社会医学（衛生学公衆衛生学）を専攻する動機づけを試みるために、社会医学サマーセミナーを開催した。全国から24名の学生の参加があり、衛生学公衆衛生学教育協議会の教授陣および厚生労働省からの特別講師が講義・特別講演を行い、学生の討議に参加した。社会医学サマーセミナーに対する参加学生の評価結果は、パブリックヘルスの多様な課題を横断的に傾聴する機会が貴重な体験であること、チュートリアル方式のグループディスカッションの有用性を示した。さらに、IT技術を利用し事前の準備をおこなうことで、セミナーの効果が増大した。これらの要素を含む教育手法は、パブリックヘルスマインド養成に効果をもたらすことが明らかになった。本年はまた、これまでの社会医学サマーセミナーを評価する目的でこれまでの参加者の進路調査を行った。その結果、本セミナーの参加者は社会医学分野への進路に強い志向性があることが明らかとなり、本セミナーが医学生への社会医学専攻への動機付けの手段として、一定の効果を持つことが客観的に実証された。

A. 研究目的

医学部・医科大学学生を対象として社会医学サマーセミナーを実施し、公衆衛生志向臨床医と公衆衛生専門家専攻を選択するパブリックヘルスマインドの養成をはかり、チュートリアル教育の効果について総合評価を行うことを目的とした。

B, C. 方法と結果

①. 第10回社会医学サマーセミナー

平成16年8月25日～27日に栃木県および群馬県において、自治医科大学地域医療学センター環境医学部門香山不二雄教授を世話人として開催した。今年度はIT技術を利用し、事前にディスカッションのテーマの準備をす

ることとし、計24名の参加学生数を得た。

衛生学公衆衛生学教育協議会の8名の教授が講師として参加した。さらに、厚生労働省から特別講師5名にご参加いただいた。セミナー事務局・協議会事務局の7名を合わせて、参加者総数は44名であった。セミナーの内容は、全体のテーマとして「足尾の歴史から社会医学の原点を考える」を設定し、講義と討論、グループ討議学生発表、厚生労働省特別講演を含む5つのセミナー、エクスカッション（足尾鉾山跡地見学）で構成した。

セミナー1の講義は、「社会医学のめざすもの（森本兼曩、大阪大学）」、「老人保健の今後の課題—介護予防をめぐって（安村誠司、福島県立医科大学）」、「食品中汚染物質のリスクの

評価（香山不二雄、自治医科大学）、「石綿の健康影響。石綿による健康被害は過去のものか？（竹内亨、鹿児島大学）」の4つであった。セミナー2の講義は「漢文・漢詩の魅力と社会医学（堀口兵剛、自治医科大学）」というテーマで、通常とは異なる視点から社会医学の魅力についてお話いただいた。セミナー3の講義は、「我が国の医療制度の動向（松田晋哉、産業医科大学）」、「コトバの化石、遺伝子の化石：環境医学の考え方（藤田博美、北海道大学）」、「生活習慣病予防から見たセレン（小山洋、群馬大学）」、「存在の認識と発想の転換による社会医学の創造（三角順一、大分大学）」、「中国における砒素フィールド調査（吉田貴彦、旭川医科大学）」の5つであった。

エクスカッションとして、足尾鉾山跡地：足尾町銅親水公園、足尾環境学習センターを見学し、環境保健ならびに社会医学の原点について学習した。

セミナーおよびエクスカッション以外の時間は適宜グループ検討会の時間にあてられた。

セミナー4のグループ発表会、全体討論では、それぞれのグループが討論の成果を発表した。5つのグループの発表テーマは、「予防医療費を保険金から拠出すべきかどうか」、「医療保険制度（医療の質の視点から）」、「砒素の健康障害について」、「企業におけるメンタルヘルスケアのあり方」及び「僻地医療の問題点《医師不足》について」であった。これらの学生発表の内容は第10回社会医学サマーセミナー報告書に掲載した。

セミナー5の特別講演では、厚生労働省大臣官房厚生科学課主任科学技術調整官迫井正深先生より「厚生労働行政について」のご講演をいただいた。また、迫井先生を含め、厚生労働省保険局医療課中谷祐貴子先生、厚生労働省大臣官房厚生科学課眞鍋馨先生、厚生労働省健康局地域保健室平子哲夫先生、国立保健医療科学院主任研究官杉江拓也先生にはグループ討論、学生発表・全体討論にご参加いただき、適切な助言・コメントをいただいた。

参加した教授と学生の各々は、セミナー参加の感想あるいは社会医学サマーセミナーへの提言を報告書として提出した。これらの報告はすべて「第10回社会医学サマーセミナー報告書」に掲載した。ほとんどの学生が社会医学セミナーの意義を高く評価しており、今後の継続を強く希望していた。特に、いろいろな大学の教授の話をもとめて聞く機会を提供するものとして、また、全国の医学生と社会医学に関連した様々な事項について討論できる場として、特に意義あるものと考えていた。本年のセミナーは去年の参加学生より示された改善点に従い、「あらかじめIT技術を利用し、学習テーマを設定し、事前に準備をする」ようにし、このことはセミナーでの討論の内容を充実したものにすることに役立った。

また、今回のセミナーではセミナーを通じて社会医学に対する学生の意識を調査するため、サマーセミナー最終日にアンケートを実施した。アンケート用紙および集計結果は資料に示した。セミナーを通じて参加学生の評価が高かったのは、他大学の医学生との交流、厚生労働省医系技官・他大学教官との交流、社会医学のテーマについてのグループ討論、厚生労働省講師による特別講演、などであった。卒後の進路については、「厚生労働行政での政策立案に取り組みたい」、「社会医学「衛生学公衆衛生学」の研究に取り組みたい」、「地域医療、僻地医療に取り組みたい」という項目について回答をする学生が多かった。全体的には本セミナーにおいて、これまで知らなかった、あるいは大学の講義だけでは実感できなかった社会医学の魅力を体感できたと回答する学生が多かった。

？．社会医学サマーセミナー参加者の進路調査

社会医学サマーセミナー第1回（平成7年）から第9回（平成15年）に参加した者のうち、大学院生、看護学生等を除く、参加時に医学生であった者を対象として、卒業後の進路状況を調査した。参加者がサマーセミナー参加時に在籍していた大学（59大学）の衛生学公衆衛生

学関連教室に依頼し、許可を得た後、各大学にて平成17年2月現在の進路を把握した。

対象人数は316名（うち、29名は複数回参加）であった。対象となった全ての大学より回答が得られたが、48名は進路先が把握できなかった。社会医学分野へ進路した者は、社会医学系（衛生学公衆衛生学関連分野）大学院生9名、厚生労働省等中央官庁9名、社会医学系教員・研究者3名、産業医2名、保健所・地方衛生行政1名であった。社会医学分野以外へ進路した者は、臨床医116名、社会医学系以外大学院生6名、基礎医学系教員・研究者2名、その他2名であった。進路先不明48名、在学中（国師浪人中含む）85名、および卒業後1年目の研修医33名を除いた150名のうち、社会医学分野に進んだ者は24名、16.0%であった。

（倫理面への配慮）

本研究は、衛生学公衆衛生学の卒前教育のあり方について検討し、パブリックヘルスマインドを養成する目的で「社会医学セミナー」のプログラムを実施し、その評価を行ったものである。セミナーの趣旨とその評価に参加することについて、参加者にあらかじめ説明し、同意をした者が参加した。セミナーの評価にあたっては、グループインタビューならびに質問紙法により行った。評価結果を匿名情報として取り扱い、分析を行った。以上に基づき、パブリックヘルスマインドを養成する教育手法について提言を行った。また、これまでの参加者の進路調査については、各大学の衛生学公衆衛生学関連教室の許可を得て行い、結果についても個人名が特定できないよう、統計的に処理をした上で公表し、個人情報保護に配慮した。

D. 考察

社会医学の多様な研究と実践を学生に理解してもらうことは、パブリックヘルスマインドを高める上で重要なことである。公衆衛生学研究ならびに行政の実践活動に基づく話題を集約的に傾聴する機会を、医学部学生が、パブリ

ックヘルスの広範囲のリサーチニーズおよび行政ニーズの広がり認識し、多様なアプローチが存在することを理解することに役立った。さらに、チュートリアル形式で、個々の学生の多様な関心に適した問題提起を行うことは、パブリックヘルスマインドを養成する効果が高いと考えられた。また、このようなチュートリアル形式での教育を行う際、IT技術等を利用し事前の準備をおこなうことで、セミナーの効果が増大させることができた。

これまでに社会医学サマーセミナーに参加した学生は、社会医学系（衛生学公衆衛生学関連分野）大学院や国・地方衛生行政等に進んだ者が多く、社会医学分野への強い志向性があることが示された。本セミナーが医学生の社会医学専攻への動機付けの手段として、一定の効果があることが客観的に実証された。

今後の社会医学教育の課題としては、このようなセミナーの場だけではなく、日常の卒前教育の場において、社会医学の魅力をアピールする機会や、学生が社会医学の重要性について体感できる場を増やしていく必要性のあることが示唆された。

E. 結論

社会医学サマーセミナーに対する参加学生の評価結果は、パブリックヘルスの多様な課題を横断的に傾聴する機会が貴重な体験であること、チュートリアル方式のグループディスカッションの有用性を示した。これらの要素を含む教育手法が、パブリックヘルスマインド養成に効果をもたらすことが明らかになった。また、社会医学サマーセミナーは、参加学生に対する社会医学専攻への動機付けの手段として、一定の効果を持つことが客観的に示された。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

本研究の経過および成果を衛生学公衆衛生

学教育協議会総会（島根：平成16年10月、新潟：平成17年3月）で発表した。

第10回社会医学サマーセミナー報告書「足尾の歴史から社会医学の原点を考える」 衛生学公衆衛生学教育協議会 2004:pp.92

H. 知的財産権の出願・登録状況
該当なし

(資 料)

第10回社会医学サマーセミナーについてのアンケート調査用紙

サマーセミナー参加学生に実施したアンケートの集計結果

社会医学サマーセミナー参加学生フォローアップ調査結果概要

5. 卒後の進路についてどう考えていますか。

- 臨床専門医としてもっぱら診療に携わりたい。
- 一般医として地域医療、僻地医療に取り組みたい。
- 基礎研究者として最先端の医学研究に取り組みたい。
- 社会医学研究者として社会医学研究に取り組みたい。
- 厚生労働省に勤務して我が国の政策立案に取り組みたい。
- 地域の保健所や保健センター等で地域の保健活動に取り組みたい。
- 国際機関や発展途上国などで国際保健活動に取り組みたい。
- 産業医として働きたい。
- その他 ()

6. セミナーに参加したきっかけは何ですか (複数回答可)。

- 以前に参加したことがある。
- ポスターを見た。
- 自治医大ホームページの案内を見た。
- 自分の所属する大学の教員に勧められた。
- 他の大学の教員に勧められた。
- 自分の所属する大学の友人に勧められた。
- 他の大学の友人に勧められた。
- その他 ()

7. 今回セミナーに参加した目的は何ですか (3つまで選択可)。

- 厚生労働省講師による特別講演。
- 他大学の社会医学の教員の講演。
- 特定の社会医学のテーマについてのグループ討議。
- 厚生労働行政の実際について理解。
- 他の大学の教員との交流。
- 他の大学の医学生との交流。
- 厚生労働省医系技官との交流。
- 足尾銅山等へのエクスカージョン。
- その他 ()

11. 足尾銅山等へのエクスカージョンはどう思いましたか。

(良かった 悪かった どちらでもない)

※具体的に感想、意見等を書いてください。

12. その他、セミナー全般にわたってどう思いましたか。

(良かった 悪かった どちらでもない)

※具体的に感想、意見等を書いてください。

13. 今回のセミナーに参加して社会医学に対する見方に変化がありましたか。

(変わらない 少し変化した 大きく変化した)

※変化した場合、具体的にどのような変化ですか。

14. 今回のセミナーに参加して自分の進路の希望について変化がありましたか。

(変わらない 少し変化した 大きく変化した)

※変化した場合、具体的にどのような変化ですか。

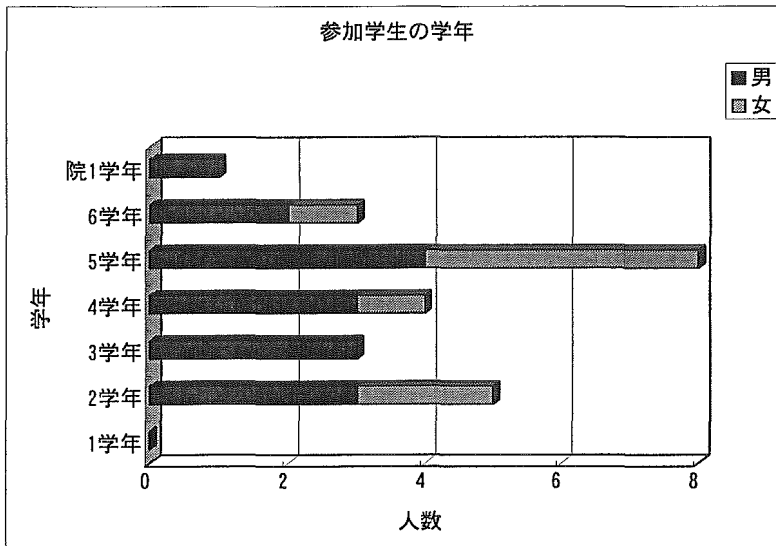
御回答どうもありがとうございました。

サマーセミナー参加学生に実施したアンケートの集計結果

今回のセミナーを通して社会医学に対する学生の意識がどのように変化したかを調査するためにアンケートを実施いたしました。アンケートはセミナー最終日に学生各自に配布し、回答してもらいました。

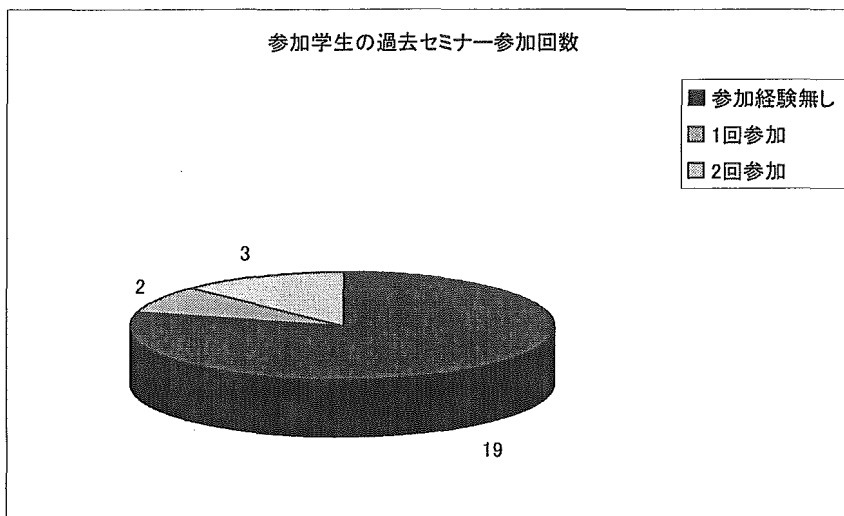
1. 学生の構成

(1) 参加学生の学年



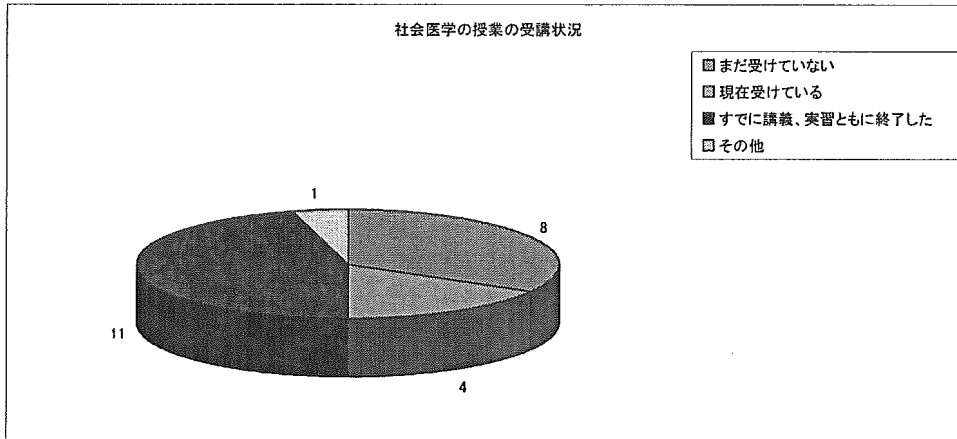
高学年の参加に比べ、低学年、特に2年生の参加が目立った。度々、新聞にも取り上げられる問題も多く関心の高さが伺える。

(2) 参加学生の過去セミナー参加回数



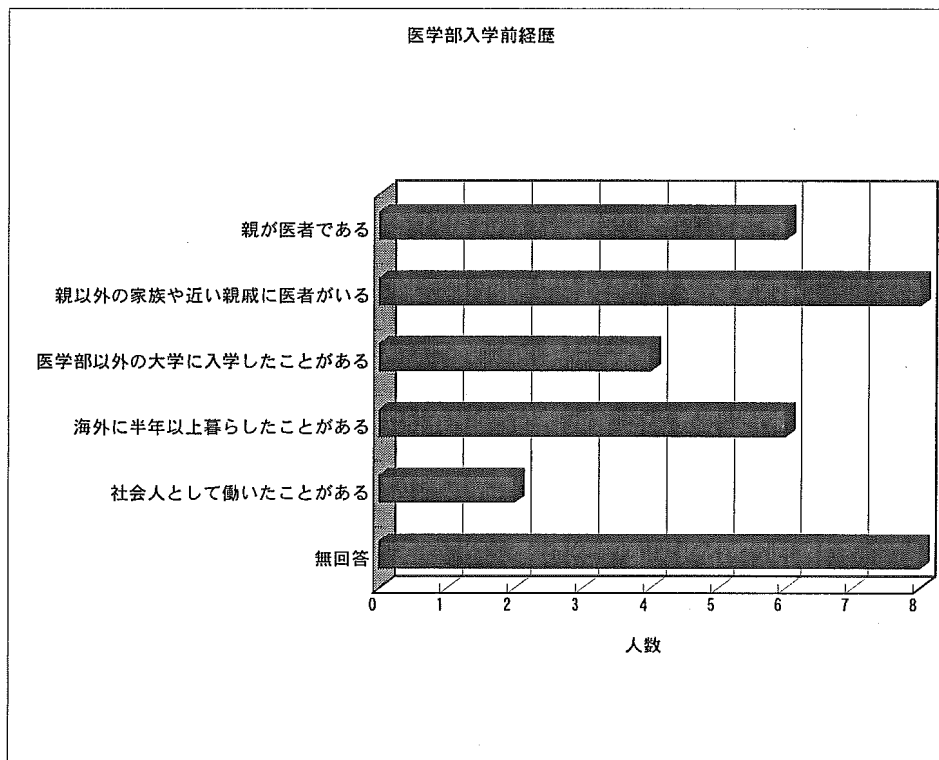
以前の参加経験者は全体の約20%であった。

(3) 社会医学の授業の受講状況



今年は低学年の積極的な参加があり、まだ受講していないものが8人あり、今後社会医学の概論・総論の講義も考慮する必要があると考えられた。

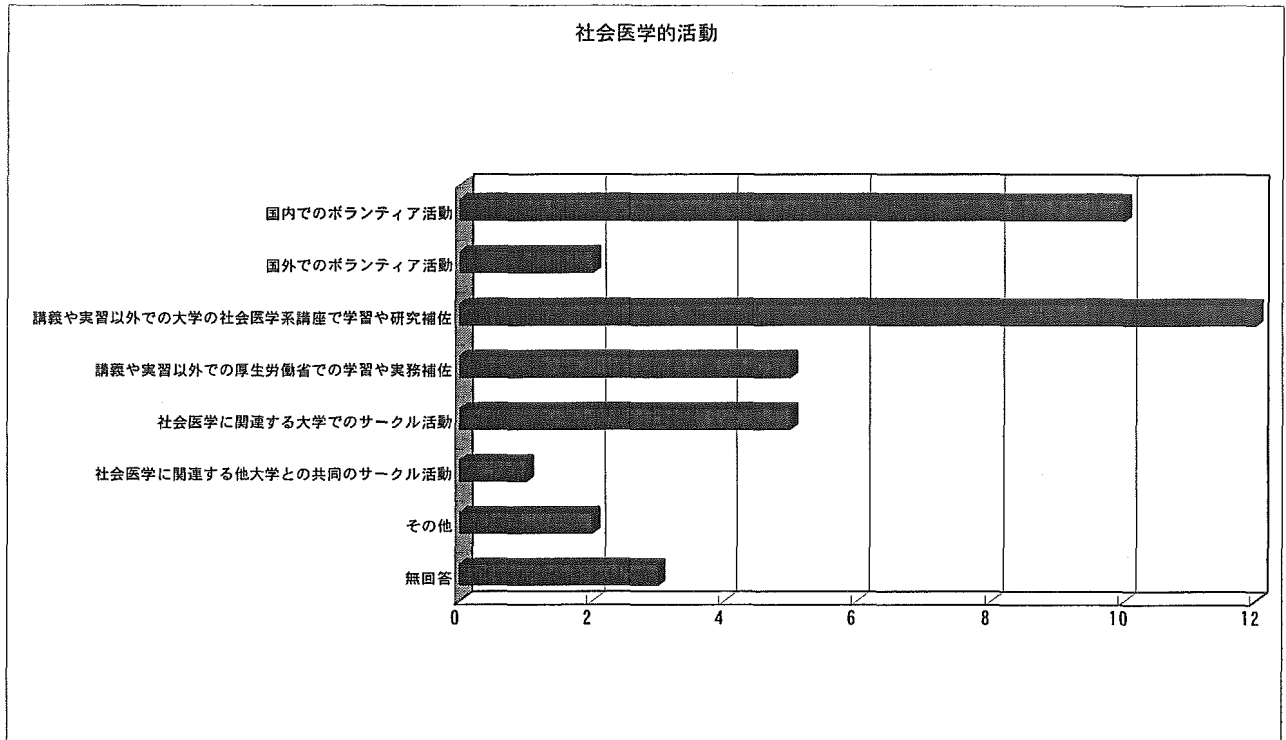
(4) 医学部に入学する前の経歴などで当てはまるものを選んでください（複数回答可）



本人の社会背景として、いろいろな要素があることが伺える。

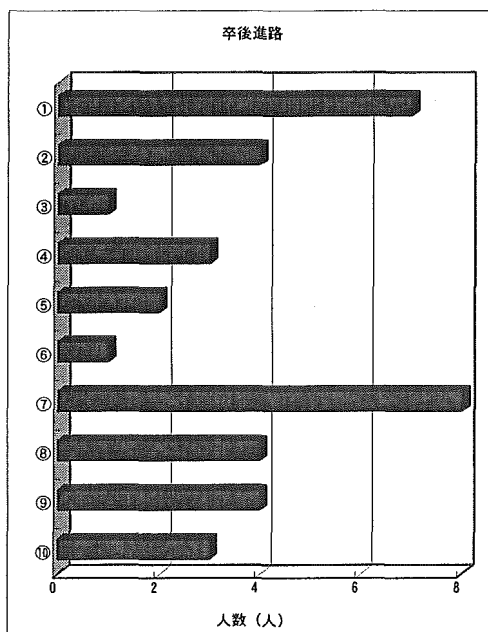
医学部以外の入学経験、海外での生活歴、社会人として経験など、幅広い視野にたつての討論など各人が有意義であったのではないかと考えられる。

(5) 今までに取り組んだ経験のある社会医学的活動を選んでください（複数回答可）



ボランティアやサークル活動あるいは研究補佐などの経験者が大多数を占め、もともと社会医学系への関心の高さが伺える。

(6) 卒後の進路についてどう考えていますか（複数回答者あり）



- ①社会医学研究者として社会医学研究に取り組みたい
- ②厚生労働省に勤務して我が国の政策立案に取り組みたい
- ③基礎研究者として最先端の医学研究に取り組みたい
- ④国際機関や発展途上国などで国際保健活動に取り組みたい
- ⑤地域の保健所や保健センター等で地域の保健活動に取り組みたい
- ⑥産業医として働きたい
- ⑦地域医療、僻地医療に取り組みたい
- ⑧臨床専門医として診療に携わりたい
- ⑨その他
- ⑩無回答

将来の展望として、各自がいろいろなものに対して関心を持っていることが伺える。

ひとつの物事に対して、いろいろな角度からのアプローチを各自が考えているように見える。